

牧師室から（2020. 9. 6）

「主よ 秋です 夏は偉大でした・・・」（『形象集』「秋の日」より）孤独で感傷的な魂を有していたマリア（男ですが）・リルケはバラの棘の傷が元で命を落としているが、作品だけでなく、その名前といい、死に方といい、うっとりしてしまうような詩人である。彼はまた『神さまの話』という短編集も残している。

この夏はとても暑く、またコロナと共に慌ただしく過ぎ去ってしまった感がある。ようやく暑さも少し和らいだと思えば今度は台風である。今秋は、静かに神様に思いを馳せつつ読書にいそしめればと願っている。

「・・・われわれはみんな落ちる この手も落ちる ほかをごらん 落下はすべてにあるのだ / けれども ただひとり この落下を 限りなくやさしく その両手に支えている者がある」（前掲「秋」より 富士川英郎訳）

（鈴木淳一牧師）